

科目「音楽Ⅰ」における音楽意識調査から見える 学習意欲と課題意識

加藤隼人・高柳希望

1. はじめに

1. 1 研究背景

中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」は授業改善の視点「主体的・対話的で深い学び」（アクティブラーニングの視点）について、その趣旨と活動の方向性について示した。その中では「主体的な学び」について「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる（学び）」と示している。この「主体的」という言葉は、これまでも多くの教員によって使われているが、実際のところ我々が関わる全ての学生が「主体的な学び」を行えているとは必ずしも言えないだろう。

1980年代後半より、アメリカやヨーロッパ諸国の教育心理研究を中心に「自ら学ぶ力」を理論的、実証的に解明しようという研究は進められ、B.ジーママン（B. Zimmerman）により自己調整学習（Self-Regulated Learning）という概念が提唱された。また、日本国内においても自己調整学習についての研究は1990年代より進められており、シンポジウムや発表など、研究が続けられている（中谷ら，2017）。「主体的な学び」すなわち「自ら学び考える力」を実践しながら実現するためにも、本研究では自己調整学習に着目した。

1. 2 自己調整学習研究について

中谷ら（2017）は自己調整学習の実践に関する研究は広がりを見せつつあるが、自己調整学習の複合的なメカニズムと多層的な特徴、また発達段階への考慮等も絡んでくることによって、実践の目的も方法も非常に多様かつ広範であるとしている。そこで、本研究の目的を焦点化するためにも、一度自己調整学習について整理しておくこととする。B.ジーママン（2001）は、自己調整学習について「生徒たちは、自分自身の学習過程の中で、メタ認知的に、動機的に、行動的に積極的な関与者であるその程

度に応じて、自己調整する」としている。また、伊藤ら（2003）は自己調整学習について、一般的には「学習者が、メタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」としており、「メタ認知」「動機づけ」「行動」について、次のように示している。

- 「メタ認知」・・・自己調整学習者が、学習過程の様々な段階で、企画を立て、自己モニターし、自己評価をしていること
- 「動機づけ」・・・自己調整学習者が、自分自身を、有能さ、自己効力、自律性を有するものとして認知していること
- 「行動」・・・自己調整学習者が、学習を最適なものにする社会的・物理的環境を自ら選択し、構成し、想像していること

さらに、瀬尾ら（2009）も自己調整学習について、学習者が「動機づけ」「学習方略」「メタ認知」の3要素において自分自身の学習過程に能動的に関与していることと定義している。そのため、本研究では自己調整学習の要因として「動機づけ」「学習方略」「メタ認知」の3要素とした。また、学生の学習意欲と課題意識を「動機づけ」の要因として分析を行った。

1. 3 研究目的

声楽やピアノ奏法のレッスンでは、マンツーマンを基本とし課題点を教員に指摘されながらの指導が一般的である。しかし、全ての教育現場において個別レッスンを行うことは時間的な都合や人力的、施設的な理由からも難しい。また、個別レッスンにも課題はあり、一般的にレッスンの効果は教員の指導力や音楽性の影響を受けやすく、相互の相性によってはマイナスに働いてしまうこともある。また、受け身の姿勢のみでレッスンを受けてしまうと、もらったアドバイスをうのみにしてしまうなど、受動的な学びになってしまうことも多い。

東北文教大学（以下、本学）人間科学部子ども教育学科における「音楽」を取り扱う科目では、集団演習や個別レッスンを中心に指導を行ってきた。これまでの全体的な課題として、集団演習では学生の個々のつまずきや課題に対応しづらく、個別レッスンでも受動的なレッスンになってしまうことがあった。

科目「音楽Ⅰ」は、1年次の前期に配置されており、小学校教諭ならびに幼稚園教諭の免許、保育士の資格必修の講義である。入学して間もない時期に開講されるため、履修者のピアノ学習歴や入学時の音楽歴の差により、総合演習やピアノ実技の進度に大きく差が出てしまうこともあった。そのため、シラバスの達成目標・到達目標でも「自身の課題を理解し、目標を持って練習計画を立て実践することができる」と明記し、課題意識を持ちながら自学習を行う「主体的な学び」の実践を促している。しかしながら、「主体的な学び」の達成度を明らかにする方法は「授業記録ノート¹」でのみとなっており、評価も採点者の主観が多く関与するため課題が多い。また、「授

¹ 「音楽Ⅰ」および「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」「音楽特修」で使用している学生の自学習を記録するためのノート。学生自身が一週間ごとの練習計画ならびに練習記録、課題検討を行う。（巻末資料1 授業記録ノート）

業記録ノート」では、前述の「メタ認知」を取り入れた課題として、学生自身が講義やレッスンを受けた段階で、課題や練習を進めるための練習計画を立て、自己の練習過程をモニターし、自身の練習内容について自己評価をしているが、効果について明らかにできているとは言い難い。

そのため、子ども教育学科音楽担当では2014年より「音楽意識調査アンケート²」を講義開始時と終了時に実施しており、その分析結果を講義内容の修正や指導方法の検証に役立てていた。アンケート開始から3年目の2017年には、高柳（2017）により音楽の能力と成績の関係性、不安要素と音楽の能力や成績の関係性については明らかにされ、同年の講義より課題の再構築や指導全般の意識改革を行った。

アンケートを実施し、担当教員で分析結果を共有したことで、課題達成度も上がり履修者の課題意識にも一定の改善は見られていた³。しかし、依然として自学習に繋がっていない一定層の履修者もいることも事実である。そのため、今回はアンケート調査の再検証を実施することとした。

本研究では、科目「音楽Ⅰ」の履修者が音楽に対してどのような印象を持つことが「主体的な学び」を行い、自己調整学習者として学習意欲を維持し自学習に取り組むことができるのか考察する。その際に、嗜好性ならびに得意度、課題意識を前述の「動機づけ」とし、到達目標への達成度により達成群、未達成群の2分割にし、課題意識から履修者の傾向を細分化し、群ごとへの指導のアプローチ方法を模索する。さらに、到達目標を達成するためにはどのような点について注意して指導するか検討する。

1. 4 科目「音楽Ⅰ」について

科目「音楽Ⅰ」は前述の通り1年次前期開講科目として、教育保育を実践するための専門知識と技術を身につける科目として配置されており、小学校教諭、幼稚園教諭、保育士に求められる音楽の基礎力の向上と音楽感覚の育成を目的としている。また、シラバス（2018年）の授業内容では「授業は45分ずつの2分割で行い、一方では、総合演習として集団で弾き歌いや音楽活動を行い、歌唱やピアノ奏法、楽典の基礎を学ぶ。もう一方では、ピアノ実技として個別またはグループレッスンを行うことで、個人の到達度に合わせたピアノ奏法を学ぶ」と示している。

例年1年次学生の定員90名+過年度生が履修するため、全体を2分割した40～47名で編成し「音楽Ⅰ（前半クラス）」「音楽Ⅰ（後半クラス）」として開講している。次に概要をまとめると以下の通りとなる。

- ①各講義では前述の通り45分ずつの2分割にし、総合演習、ピアノ実技を行っている。
- ②音楽歴調査票により、ピアノ未経験者のAグループ、経験者のBグループに分かれ、各グループ内で音楽の能力の差が少なくなるよう配慮している。
- ③学生は1コマの中で、総合演習45分、ピアノ実技45分を行う。
- ④総合演習は、全体担当教員1名が担当し、「新版 一人でマスター ピアノ伴奏法入門」（鈴木渉：子どもの未来社）をテキストに用い、20～23名を対象にPML教室にて集団で楽典ならびに弾き歌いの演習を実施している。

² 「音楽意識調査アンケート」は資料として、巻末資料3、4に掲載している。

³ 学生が異なるため厳密な比較はできず参考程度ではあるが、アンケート調査を開始した年より履修者全体の課題達成度が上がっており、「音楽Ⅰ」の評定の平均値は2014年では68.87点だったのに対し、2015年75.14点、2016年80.39点、2017年81.71点と上昇傾向となっている。

- ⑤ピアノ実技では、ピアノレッスン担当教員5名が担当し、「ペアで楽しむピアノ教本」(藤澤孚:音楽之友社)、「やさしくひける チャーミング・クラシック①」(森ミドリ:カワイ出版)をテキストに用い、各5、6名を対象に個人またはグループレッスンを実施している。

1. 5 音楽Iにおけるピアノ実技について

ピアノ実技はピアノ学習表(巻末資料2)を用い、履修者の演奏力に合わせて進度を調整しながら、前途の通り個人またはグループレッスンを実施している。しかし、5名のピアノレッスン担当教員が5名または6名の履修者を担当するため、5名を担当する場合でも履修者1名に対して9分、6名を担当する場合は7分程度しか個別レッスンを行うことができない。そのため、ピアノレッスン担当教員が効率よく指導することはもちろんのこと、履修者自身が「主体的な学び」を行い、自己調整学習者として能動的に自学習を行うことが必要不可欠になる。

2. 調査

2. 1 先行研究

高柳(2017)は①音楽歴別アンケート結果、②音楽の経験と授業成績の関係、③不安要素と音楽の能力との関係性、④不安要素と成績との関係性について調査を行った。これらのことにより、①音楽歴別アンケート結果においては、好みと得意度における割合の高低が一致するとは言えないことが分かった。

また、②音楽の経験と授業成績の関係においては、音楽の能力から成績を見てみると、音楽の能力が高い学生であっても60点台が3%であること、音楽の能力が低い学生であっても、80点台の学生がいることから、音楽の能力の高さと成績の高さは一致しているとは言えなかった。しかし、成績から音楽の能力を見てみると、60点台の学生は音楽の能力が低い学生が多く、90点台の学生は音楽の能力が高い学生が多いということが音楽の経験と授業成績の関係から見ることができた。

さらに、③不安要素と音楽の能力との関係性においては、音楽の能力が高い学生はピアノ実技の表現に不安を感じており、一方で音楽の能力の低い学生に関しては、技術面である左右異なる動きに不安を感じていた。

そして、④不安要素と成績との関係性においては、点数の低い学生は歌唱(弾き歌い)、ピアノ実技とともに音程と左右異なる動きといったような技術面に不安を感じているということが、不安要素と成績との関係性から明らかとなった。

2. 2 調査対象

調査対象は、平成30年度科目「音楽I」履修者87名である。平成30年4月11日(水)に授業開始時アンケート、平成30年8月1日(水)に授業終了時アンケート調査を行い、82名より協力を得られた。

2. 3 アンケート内容「音楽意識調査アンケート」について

現在のアンケート内容(巻末資料3、4)は、2016年より使用している。2014年よ

り行っているアンケート調査だが、開始当時の設問内容である歌唱、ピアノ奏法、弾き歌いそれぞれについての（A）好み、（B）得意度、音楽記号についての理解度に加え、歌唱（弾き歌い）、ピアノ奏法に関して不安を感じていることを問う内容に焦点をあてている。内容の改訂にあたっては、歌唱、ピアノ奏法、弾き歌いそれぞれについて、得意と答えた学生、苦手と答えた学生であったとしても、それぞれに不安な点があると考えた。また、指導についての問題点を明らかにするために、これまでの実技レッスンにおいて、多くの学生が不安要素と挙げていた要素を提示し、選択式の設問を追加した。

項目に関しては、小学校学習指導要領解説音楽編に示されている音楽を特徴付けている要素（音色、リズム、速度、旋律、強弱、拍の流れやフレーズなどの音楽を特徴付けている要素）、平成28年度東北文教大学子ども教育学科、音楽Ⅰ・Ⅱピアノ課題曲一覧、Aグループ音楽Ⅰ到達目標である[11]までの目的を考慮し決定した。

2. 4 調査内容

本研究では、成績ならびにアンケート結果の2つの視点から分析を行う。弾き歌い、ピアノ奏法について、成績S、Aの者を到達目標達成群、成績B、Cの者を未達成群とする。さらに、「音楽Ⅰ終了時アンケート」の（2）「（A）どのくらい好きになったか【好み】」での回答を嗜好性、「（B）どれくらい得意と感じるようになったか【得意度】」での回答を得意度、また（3）（4）での回答を課題意識とし、以下の内容について比較・検討を行った。

- 1) 弾き歌いに対する達成群と未達成群の課題意識について
- 2) 弾き歌いに対する達成群と未達成群の嗜好性ならびに得意度について
- 3) ピアノ奏法に対する達成群と未達成群の課題意識について
- 4) ピアノ奏法に対する達成群と未達成群の嗜好性ならびに得意度について

3. 結果

3. 1 弾き歌いに対する課題意識について

弾き歌いに対する課題意識を成績の項目別にまとめると、表1の通りとなる。なお、課題意識のアンケート調査（3）は複数回答である。

表1 弾き歌いに対する課題意識の割合（人数）

	音程	音域	発声	リズム	表現	読譜
達成群 (54)	26% (14)	43% (23)	44% (24)	13% (7)	52% (28)	15% (8)
未達成群 (28)	54% (15)	57% (16)	71% (20)	25% (7)	46% (13)	18% (5)

達成群、未達成群を比較すると、音程、発声の項目では30%に届くほどの差が生じていた（音程:達成群26%、未達成群54%、発声:達成群44%、未達成群71%）。また、音域、リズム、表現、読譜については大きな差が見受けられなかった。さらに、達成群を見てみると音楽Ⅰの到達目標に届くようになってからも、音域43%、発声44%、表現52%と課題と感じながら取り組んでいることが分かる。

上記により、未達成群では音程、発声についての苦手意識をある程度緩和しなければ、到達目標を達成できない、もしくは到達目標を達成しようという思考に向かうことができなかつたため「主体的な学び」を行うことができず、自己調整学習者としての能動的な自学習ができなかつたと考えることができる。

さらに、達成群でも音域、発声、表現についての課題意識がある程度高かつたため、課題意識を持つことで「主体的な学び」を行い、自己調整学習者として能動的に自学習を行ったことで、到達目標に達成したと考えることができる。

3. 2 弾き歌いに対する嗜好性ならびに得意度について

また、弾き歌いに対する嗜好性ならびに得意度について比較すると、図1の通りとなる。

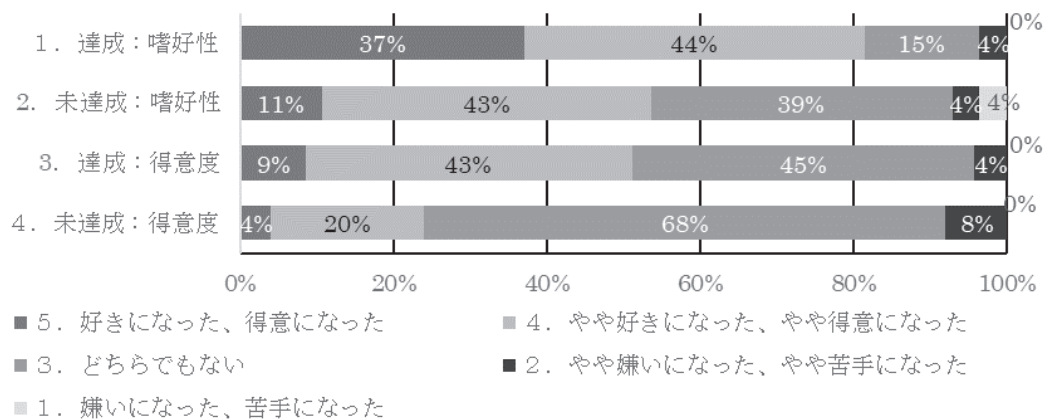


図1 弾き歌いに対する嗜好性ならびに得意度

嗜好性を比較すると、達成群では「好きになった、やや好きになった」の合計が71%に対し、未達成群は52%にとどまり「どちらでもない」が45%となっている。また、得意度でも達成群では「得意になった、やや得意になった」の合計が54%となっているのに対し、未達成群では24%と半数以下となり、「どちらでもない」が68%と圧倒的多数となった。課題意識を持ちながら到達目標を達成することで、嗜好性は達成群が高いと予測していたが、得意度でも達成群が高くなっていた。

上記により、嗜好性、得意度を高めることでも「主体的な学び」を促し、自己調整学習者として能動的に自学習を行いながら、到達目標に達成したと考えることができる。

3. 3 ピアノ奏法に対する課題意識について

ピアノ奏法に対する課題意識を成績の項目別にまとめると、表2の通りとなる。なお、課題意識のアンケート調査（4）は複数回答である。

表2 ピアノ奏法に対する課題意識の割合（人数）

	左右異なる動き	指の独立	さぐり弾き	リズム	表現	読譜
達成群 (53)	30% (16)	38% (20)	26% (14)	36% (19)	68% (36)	28% (15)
未達成群 (29)	38% (11)	31% (9)	31% (9)	34% (10)	55% (16)	7% (2)

達成群、未達成群を比較すると、弾き歌いに対する課題意識とは異なり読譜以外差がほぼ見られなかった（読譜：達成群28%、未達成群7%）。また、指の独立、リズム、表現、読譜に関しては達成群の方が若干課題に感じている割合が高い（指の独立：達成群38%、未達成群31%、リズム：達成群36%、未達成群34%、表現：達成群68%、未達成群55%、読譜：達成群28%、未達成群7%）。さらに、リズムと表現と読譜に至っては弾き歌いと同じ項目であるが、読譜の未達成群以外ピアノ奏法に対する課題意識の割合の方が高い結果となった（弾き歌いリズム：達成群13%、未達成群25%、ピアノリズム：達成群36%、未達成群34%、弾き歌い表現：達成群52%、未達成群46%、ピアノ表現：達成群68%、未達成群55%、弾き歌い読譜：達成群15%、未達成群18%、ピアノ読譜：達成群28%、未達成群7%）。さらに、達成群、未達成群ともに表現の割合が高く50%を超えている（表現：達成群68%、未達成群55%）。技術のみにとらわれず表現を意識し練習に励むことができていることがうかがえる。これらのことから、真剣に向き合っていたからこそ授業を受けていくうちに自らの課題意識が高まっていったと考えられる。

しかし、読譜以外では大きな差が見られなかったことから、どの要素が「主体的な学び」を促し、自己調整学習者として能動的な自学習を行うことに繋がったかについては明らかにできなかった。これは、未達成群への課題の指摘が不十分で、履修者が課題意識を持つに至らなかったことも要因として考えられる。今後も継続して検証を行っていきたい。

3. 4 ピアノ奏法に対する嗜好性ならびに得意度について

また、ピアノ奏法に対する嗜好性ならびに得意度について比較すると、図2の通りとなる。

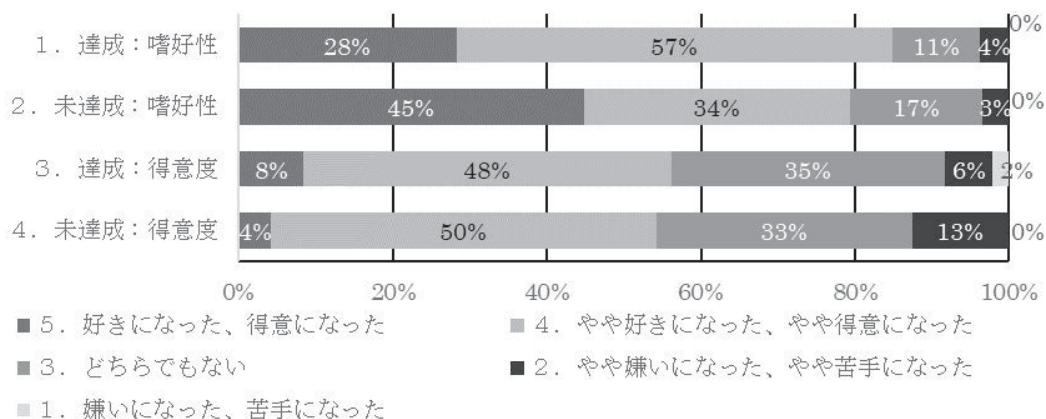


図2 ピアノ奏法に対する嗜好性ならびに得意度

嗜好性を比較すると、達成群では「好きになった」が28%に対し、未達成群は45%であった。一方で、「好きになった、やや好きになった」の合計では達成群が85%に対し、未達成群は79%であり割合差6%ではあるが達成群が高い割合となっている。また、「やや嫌いになった、嫌いになった」の割合差は1%とほとんど差がない上に達成群が高い割合となっている。

さらに、得意度を比較すると、達成群では「得意になった、やや得意になった」が56%に対し、未達成群は54%とともに半数以上となった。未達成群の学生に関して、未達成にはなってしまったもののアンケート内容が「得意に感じているか」ではなく「開始時と比べ得意になったか、上達したか」と問うているため、高い結果となったと考えられる。

嗜好性、得意度についても大きな差を認めることができなくなったため、どの要素が「主体的な学び」を促し、自己調整学習者として能動的な自学習を行うことに繋がったかについては明らかにできなかった。こちらは、前述の通り設問についての課題が原因であろう。履修者に「開始時と比べ得意になった。上達した」と感じてもらえることは担当者として大変ありがたいことだが、課題意識を調査するためには設問や検証方法についての再検討が必要である。今後も継続して検証を行っていきたい。

4. おわりに

本研究では、受講生の自学習を促す自己調整能力向上のために「音楽意識調査アンケート」と受講生の到達目標への達成度を分析したが、総括は以下の通りである。

- 1) 弾き歌いにおいて、未達成群では音程、発声についての苦手意識をある程度緩和しなければ、到達目標を達成できない、もしくは到達目標を達成しようという思考に向かうことができなかつたため「主体的な学び」を行うことができず、自

己調整学習者としての能動的な自学習ができなかったと考えることができる。

- 2) 弾き歌いにおいて、達成群でも音域、発声、表現についての課題意識がある程度高かったため、課題意識を持つことで「主体的な学び」を行い、自己調整学習者として能動的に自学習を行ったことで、到達目標に達成したと考えることができる。
- 3) ピアノ奏法において、読譜以外では課題意識に大きな差を認めることができなかったことから、どの要素が「主体的な学び」を促し、自己調整学習者として能動的な自学習を行うことに繋がったかについては明らかにできなかった。
- 4) ピアノ奏法において、嗜好性、得意性について大きな差を認めることができなかったことから、どの要素が「主体的な学び」を促し、自己調整学習者として能動的な自学習を行うことに繋がったかについては明らかにできなかった。

L.B.ニルソン（2017）は自己調整学習ができない学生について「自分が何を理解し、何を理解していないのかを分かっておらず、そのため、内容を理解して覚えられると楽観的に考えている」と述べている。ピアノ奏法において、未達成群の課題意識が低かったことは、この傾向があると言えるだろう。また、嗜好性、得意度については達成群の方が高い傾向にあり、これは「好きだ」や「得意だ」と感じるものが、「主体的な学び」を行い、自己調整学習者として学習意欲を維持し、自学習を集中して行うことで課題を達成できたと考えられる。

また、澤井（2017）は「主体的な学び」を実践するための授業改善の一例として授業ストーリーの共有を挙げており、児童の理解進度を次のようにまとめている。

- ①授業には学習問題というものがある。
- ②その学習問題を解決することが学習の目的である。
- ③それでは、学習の目的達成のために、何に着目し、どう調べ考え学んでいけばよいか。

さらに「これから私たちが受ける授業は、どのように進んでいくのか」という内容を子どもたちと共有することで、問題解決の見通しを持ってもらうことが大切だとしている。「音楽Ⅰ」でも自学習の効果を高めるためには、これまでの「授業記録ノート」のみではなく、毎講義ごとに授業ストーリーの確認を行い、履修者の「主体的な学び」を促し、自己調整学習の重要性を意識させるような学習活動や課題設定を行わなければならない。

しかし、今回の再検証ではピアノ実技での課題意識についてなど、まだ明らかにできていない点も多い。今後は音楽意識調査アンケートの内容について再修正に加え、検証方法についても再検討が必要だろう。また、伊藤ら（2003）は自己効力感が高いものほど、認知的側面時の自己調整学習方略と内発的調整方略をよく用い、外発的調整方略は用いないとしている。さらに、内発的調整方略をよく使用しているものほど学習において持続性が高く、外発的調整方略をよく用いているものほど持続性が低いとしている（伊藤，2009）。本研究では自己効力感について検討を行うことができなかったが、実技を伴う「音楽Ⅰ」だからこそできる自己効力感を高める講義内容の構築が可能ではないか。そのためにも、今後も「主体的な学び」や自己調整学習につい

ての理解を深め、履修者が課題意識を持ちながら自学習を進められる講義内容の探究に邁進していきたい。

【参考文献】

- B.J. Zimmerman & D.H. Schunk (Eds.), 2001, *Self-regulated learning and academic achievement: Theoretical perspectives*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. (塚野州一編訳 (2006)『自己調整学習の理論』北大路書房)
- 伊藤崇達 (2009)『自己調整学習の成立過程 - 学習方略と動機づけの役割 -』北大路書房.
- 瀬尾美紀子, 中谷素之, 伊藤崇達, 塚野州一, 岡田いずみ, 植阪友理, 岡田涼, 市川伸一 (2009)『自己調整学習研究の新たな展開: 学習者の動機づけと認知の関連の統合的理解に向けて』日本教育心理学会第51回総会発表論文集 < https://www.jstage.jst.go.jp/article/pamjaep/51/0/51_S90/_pdf/-char/ja > 2019年1月24日アクセス.
- 中谷素之, 篠ヶ谷圭太, 伊藤崇達, 瀬尾美紀子, Hefer Bembenutty#, 秋場大輔 (2017)『わが国における自己調整学習の展開と未来 理論と実践の両面から』日本教育心理学会第59回総会発表論文集 < <https://confit.atlas.jp/guide/event-img/edupsyh2017/JB04/public/pdf?type=in> > 2019年1月24日アクセス.
- L.B. Nilson, 2013, *Creating Self-Regulated Learners: Strategies to Strengthen Students' Self-Awareness and Learning Skills*: Stylus Pub Llc. (美馬のゆり, 伊藤崇達監訳 (2017)『学生を自己調整学習者に育てる - アクティブラーニングのその先へ -』北大路書房)
- 伊藤崇達, 神藤貴昭 (2003)『自己効力感, 不安, 自己調整学習方略, 学習の持続性に関する因果モデルの検証: 認知的側面と動機づけ的側面の自己調整学習方略に着目して』日本教育工学雑誌27巻4号.
- 高柳希望 (2017)『教員養成課程学生への音楽意識調査』上越教育大学大学院学校教育研究科修士論文 (未公刊).
- 文部科学省 (2008)『小学校学習指導要領解説音楽編』教育芸術社. p.41.
- 文部科学省 (2016)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申) (中教審第197号)』 < http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf > 2018年12月17日アクセス.
- 澤井陽介 (2017)『授業の見方「主体的・対話的で深い学び」の授業改善』東洋館出版社.

巻末資料1 授業記録ノート

本日の授業内容

授業日 月 日 ()

集団授業

内 容	アドバイス	課 題

レッスン

曲 名	内 容	アドバイス

課題

--

今週の練習

次回までの目標（2週以上の場合は週ごとに目標を立てましょう）

--

練習の記録（1週間を超える場合は次ページを利用してください）

月 日	時間(分)	内 容

今週の反省

--

担当者サイン _____

巻末資料2 ピアノ学習表P.1

ピアノ学習表

学籍番号

氏名

使用教材：ペアで楽しむピアノ教本（藤澤 早 編著）音楽之友社 （ペ）
チャーミング・クラシック①（森 ミドリ 編曲）カワイ出版（チャ）

進度	課題曲	目的	達成日	確認印
1	よちよちおさんぼ (A-1) (ペ) pg. 7	両手でメロディーを弾く。ト音記号の楽譜を読む。指番号を把握する。四拍子。		
2	よちよちおさんぼ (ペ) pg. 9 ちょうちょう (ペ) pg. 10	左手で伴奏和音を弾く。へ音記号のを理解する。		
3	イギリスの踊り (ペ) pg. 14	八分音符や付点のリズムを正しく弾く。IVの和音を覚える。三拍子。		
4	準備練習 (ペ) pg. 13	バイエル No. 49 の導入。指の独立。分散和音を弾く。		
5	バイエル No. 49 (ペ) pg. 13	メロディーに分散和音の伴奏を合わせる。		
6	アイネ・クライネ・ナハトムジーク (チャ) pg. 4	付点音符・16分音符を旋律的に弾く。原曲（弦楽）を聞きイメージをつかむ。		
7	バイエル No. 60 (ペ) pg. 30	短調と長調の違いを表現する。へ音記号に慣れる。ポジションの移動。		
8	鐘 (ペ) pg. 27	重音をレガートで弾く。		
9	バイエル No. 65 (ペ) pg. 24	音階をなめらかに弾く。タイを理解する。ポリフォニーを意識する。		
10	調子のよい鍛冶屋 (チャ) pg. 5	へ長調を理解する。3-5 の 4 度、5-2 の 6 度の拡張。		
11	バイエル No. 76 (A-1) (ペ) pg. 28	ト長調を理解する。ダイナミクスを生かし、曲調を表現する。		
12	愛の悲しみ (チャ) pg. 10	ペダルの使用。分散和音の拡張ポジションに慣れる。臨時記号を正しく読む。		
13	バイエル No. 78 (ペ) pg. 41	しっかりとしたタッチと滑らかなフレーズを弾き分ける。		
	バイエル No. 90 (ペ) pg. 42			
14	バイエル No. 88 (ペ) pg. 42	ト長調のスケールを滑らかに弾く。5の指を保持したアルベルティ・パスの練習。		
15	ジュ・トゥ・ヴ (チャ) pg. 7 ★から★★まで	ペダルの応用。フレーズを歌う。フランス音楽に触れる。		
16	誕生日のマーチ (ペ) pg. 44	繰り返し記号を正しく理解する。		
17	バイエル No. 91 (ペ) pg. 43	粒のそろった十六分音符を弾く。 ※音楽Ⅱ修了目標課題		
	アラベスク (A) (ペ) pg. 62			

巻末資料2 ピアノ学習表P.2

進度	課題曲	目的	達成日	確認印
18	江戸の子守歌(チャ) pg. 12	安定したテンポでレガートを弾く。音色を工夫する。		
	ブラームスの子守歌(チャ)pg. 14 ★から★★まで			
19	ガボット (ペ) pg. 33	軽快なスタッカートを弾く。		
20	カノン (チャ) pg. 25	バロック音楽に触れる。		
	春 (チャ) pg. 28			
21	白鳥 (チャ) pg. 19	標題音楽やバレエ音楽に触れる		
	白鳥の湖 (チャ) pg. 22★から			
自由曲			達成日	確認印

バイエル終了程度（進度17修了）の演奏力を身に付けたことを、ここに認定します。

レッスン担当者 印

- ※進度13、17、18、20、21は選択曲です。もちろん両方挑戦しても構いませんが、1曲以上の合格が到達目標です。
- ※補助教材として上記以外の曲を進めた場合は、空欄に記入してください。
- *課題曲修了までは担当教員と相談の上、自分の技量にあった選曲をし、できるだけ複数の曲を並行して進めましょう。バイエルとチャーミング・クラシックを併用することで、課題達成の進度やテクニックの習得が速くなります。
- *ピアノの技術は免許・資格にとって必須です。課題曲のみにならないよう練習し、積極的に自分のレパートリーを増やしましょう。
- *ピアノ奏法には日々の研鑽が必要です。“3日の休みを取り戻すには1週間かかる”と言われるので、毎日の練習を怠らないでください。

巻末資料3 音楽I 開始時アンケート

★マークのしかた



音楽I 開始時アンケート

音楽に関する意識調査1

学籍番号

氏名

今後の授業展開、進行計画の参考とするためにアンケートを実施します。記名式ではありませんが、授業分析以外には使用しませんので、率直に感じていることを教えてください。

選択式の回答は、該当箇所のマーク○を塗りつぶしてご回答ください。

○: 空白マーク ●: 正しいぬりつぶし ◐: 不十分なぬりつぶし

記述式の回答は、回答欄からはみ出さないように記入してください。

この用紙は機械で処理します。回答欄以外に書き込みをしたり、用紙を汚したり、折り目を付けたりしないように注意してください。

- (1) 学籍番号についてお伺いします。設問にしたがって各項目より、1つずつマークをしてください。
(例: 5番なら「0」、「5」とマークしてください)

		学籍番号									
		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1	学籍番号の下2桁目 (例: 「1234○▲」なら○の数字)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	学籍番号の下1桁目 (例: 「1234○▲」なら▲の数字)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

- (2) 続いて音楽に関する意識調査です。以下の各項目について、あなたは「(A)どのくらい好きだと思うか【好み】」と「(B)どのくらい得意と感じているか【得意度】」をお答えください。
(A)と(B)の両方の該当する箇所(各項目1カ所づつ)を塗りつぶしてください

	(A)好み					(B)得意度				
	好き	やや好き	どちらでもない	やや嫌い	嫌い	得意	やや得意	どちらでもない	やや苦手	苦手
1 歌唱(歌うこと)について	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2 ピアノを弾くことについて	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3 弾き歌いについて	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

- (3) 歌唱(弾き歌い)についてお伺いします。「音楽I」履修前に不安に感じているものを選んでマークしてください。(複数回答可)

○音程 ○音域 ○発声 ○リズム ○表現 ○読譜

- (4) ピアノについてお伺いします。「音楽I」履修前に不安に感じているものを選んでマークしてください。(複数回答可)

○左右異なる動き ○指の独立 ○さぐり弾き ○リズム ○表現 ○読譜

- (5) 音楽記号(表情記号等)は理解できますか。当てはまる項目を1つ選んでマークしてください。

○理解できる ○やや理解できる ○どちらでもない ○やや理解できない ○理解できない

- (6) 自由記述欄です。これから音楽を履修する上で考えていること・感じていることをご自由にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

巻末資料4 音楽Ⅰ 終了時アンケート



音楽Ⅰ 終了時アンケート 音楽に関する意識調査2

学籍番号

氏名

今後の授業展開、進行計画の参考とするためにアンケートを実施します。記名式ではありますが、授業分析以外には使用しませんので、率直に感じていることを教えてください。

選択式の回答は、該当箇所のマーク○を塗りつぶしてご回答ください。

○: 空白マーク ●: 正しいぬりつぶし /: 不十分なぬりつぶし

記述式の回答は、回答欄からはみ出さないように記入してください。

この用紙は機械で処理します。回答欄以外に書き込みをしたり、用紙を汚したり、折り目を付けたりしないように注意してください。

- (1) 学籍番号についてお伺いします。設問にしたがって各項目より、1つずつマークをしてください。
(例: 5番なら「0」、「5」とマークしてください)

		学籍番号									
		0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
1	学籍番号の下2桁目 (例: 「1234○▲」なら○の数字)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	学籍番号の下1桁目 (例: 「1234○▲」なら▲の数字)	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

- (2) 続いて音楽に関する意識調査です。以下の各項目について、「音楽Ⅰ」を履修したことで、あなたは「(A)どのくらい好きになったか【好み】」と「(B)どれくらい得意と感じるようになったか【得意度】」をお答えください。
(A)と(B)の両方の該当する箇所(各項目1カ所づつ)を塗りつぶしてください

	(A)好み					(B)得意度				
	好きになった	やや好きになった	どちらでもない	やや嫌いになった	嫌いになった	得意になった	やや得意になった	どちらでもない	やや苦手になった	苦手になった
1 歌唱(歌うこと)について	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2 ピアノを弾くことについて	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
3 弾き歌いについて	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

- (3) 歌唱(弾き歌い)についてお伺いします。「音楽Ⅰ」履修後、いまだに不安に感じているものを選んでマークしてください。(複数回答可)
○ 音程 ○ 音域 ○ 発声 ○ リズム ○ 表現 ○ 読譜
- (4) ピアノについてお伺いします。「音楽Ⅰ」履修後、いまだ不安に感じているものを選んでマークしてください。(複数回答可)
○ 左右異なる動き ○ 指の独立 ○ さぐり弾き ○ リズム ○ 表現 ○ 読譜
- (5) 「音楽Ⅰ」を履修したことで、音楽記号(表情記号等)は理解できるようになりましたか?当てはまる項目を選んでマークしてください。
○ 理解できるようになった ○ 少しは理解できるようになった ○ どちらでもない ○ あまり理解できていない ○ 理解できていない

- (6) 自由記述欄です。音楽Ⅰを履修した後で考えていること・感じていることをご自由にご記入ください。

ご協力ありがとうございました。

本稿では、加藤隼人が「1. はじめに」「3. 1 弾き歌いに対する課題意識について」「3. 2 弾き歌いに対する嗜好性ならびに得意度について」「4. おわりに」、高柳希望が「2. 調査」「3. 3 ピアノ奏法に対する課題意識について」「3. 4 ピアノ奏法に対する嗜好性ならびに得意度について」の執筆を担当した。